

大学図書館でさまざまな活動を行う「リリアン」が 紀伊國屋書店とコラボし、女性向け本のフェアを開催

“Girl meets the Library”をコンセプトに、金城学院大学図書館で多彩な活動を行っているライブラリー・サポーターズ「リリアン」。今回、紀伊國屋書店とコラボして、8月20日から9月18日まで紀伊國屋名古屋空港店で女性客向けのフェア「Girl♡Girl♡125」を開催しました。

このフェアのきっかけとなったのは、図書館の「つばや木」プロジェクトで行った「森の中の図書館大賞」です。“女の子におすすめしたい本”を募集したところ、約8ヶ月の間に272作品が集結。854人の学生による投票結果によって、1位から10位まで決定するというイベントを行いました。これに興味を持った紀伊國屋書店が、「夏休みに合同でイベントをしませんか」と図書館にご提案をいただいたことから、今回のフェアを行うこととなったのです。

準備は4月からスタート。“大人ガール”をコンセプトにターゲットをすべての年代の女性とし、金城学院創立125周年にちなんでテ-



右から人間科学部多元心理学科2年の山下実咲さん、文学部日本語文化学科2年の尾関未紗さん、4年の和田紗綺さん、4年の関戸月さん、3年の澤岨未織さん、3年の福田梨乃さん

マを「Girlが選んだGirlに贈る125冊」に決定。4年生が中心となって「つばや木」に寄せられた作品の中から選書をしました。

また棚の装飾やPOPは夏休み中に製作。「メンバーみんなで楽しみながら作りました」と3年生の福田梨乃さんは話します。装飾は主に4年生の指導を受けながら作り、「限られたスペースで、どのように作品のよさを伝えたらよいかを考えるのが難しかったです」という2年生の尾関未紗さん。作品の要点をまとめ、POPをつける作業は大変だったと話します。

書店の本棚6本を使って行われた

フェアは盛況。1位に選ばれた『うさぎパン』の作者、瀧羽麻子先生のサインも寄せられ、注目を集めました。「女性だけではなく、男性も本を手にとってくれていたことが嬉しかった」と3年生の澤岨未織さんはいいます。また福田さんは「絵本を並べているときに、小さな女の子が興味を持って近づいてきてくれたときは感動しました」と話し、尾関さんも「普段書店に並ばない本の中にも素敵な本はたくさんあります。そういう本とフェアに来てくれたお客さんを結びつけることができよかったです」と、自分たちが選んだ本のすばらしさを多くの人々に発信できたことに達成感を感じています。



森の中の図書館大賞

図書館と学生をつなぐ 大切な橋渡し役に

「リリアン」は1年生から薬学部の5年生まで30人が所属。テーマを定めて選書し、本棚の展示を行うチーム、図書館のラウンジ展示を担当するチーム、年二回の選書会や大学祭などのイベントを担当するチーム、2ヶ月に一回“リプレター(図書館だより)”を発行するチームの四つに分かれて活動を行っています。そのほか、授業の空き時間に書架整理もサポートするなど積極的な活動を行っています。「大学の図書館は学修や研究の補助をする役割があります。しかし学生にもっと本を好きになってもらう機会を作ることもまた図書館の大切な

役割です。リリアンが選ぶ本はいつも大人気で、学生が本を読むきっかけにもなっていると思います。リリアンは図書館と学生をつなぐ、大切な橋渡し役です」と二杉孝司図書館長はいいます。また図書館職員の高岡亜佳音さんや石田翔子さんも「アイデアあふれる本の展示に毎回感動します」「学生が今、何に興味を持っているのかの勉強になります」と話し、図書館にとってリリアンは大切な存在だといいます。「来年もフェアができれば」と話すリリアンメンバーの今後の活躍に期待します。



レースを使い、愛らしく飾られたPOPはすべてメンバーの手作り。本を紹介するコピーも多くの人々の心を掴んだ

拡大版「縦割り保育」を行い 幅広い人間関係を体験、成長へ



年少児から年長児まで3学年が一緒に生活する「縦割り保育」は、金城学院幼稚園の大きな特色です。この縦割り保育を子ども同士のかかわりのみと捉えず、「幼稚園も小さなひとつの社会」という考えで、さまざまな人を巻き込んでの拡大版縦割り保育を行っています。

その中の一つである「保育参加」は、参観のよう

どもと一緒にさまざまな活動を行います。子どもは友だちのお母さんと一緒に活動する中で、自分のお母さんとは違う“何か”を感じながら、多様な価値観を育んでいきます。また保護者は我が子以外の子どもたちともかかわり合いながら子どもを客観的に見る力を培い、子どもの多様性や成長の違い、一人ひとりの個性の違いを実感することができます。

また、「〇〇父さん・母さん」と称して、子どもたちと遊びながら自然な形でかかわる機会を設けています。今年は「絵本読み父さん・母さん」や「水あそび父さん・母さん」有志を募集しました。子どもたちの普段の遊びや生活ぶりを垣間見られるため、募集はいつもすぐ埋まります。子どもたちは一緒に遊んでくれる父さん・母さんに心を開き、自分たちの遊びを教えたり、ときには甘えたりしながら幅広い人間関係を体験しています。

間関係を体験しています。

ほかにも、金城学院大学の英米学科からは英語で遊ぶ「英語のお姉さん」が来てくれたりします。年長児は近隣の小学校を訪問し、小学生と交流する機会も設けています。

こうしたさまざまな人々との幅広い人間関係を体験することで、お互いの違いを認識しながら、他者とともに生きる力が育ってくれることを願っています。



成長しても帰ることのできる場所 卒園後もつながる幼稚園へ

幼稚園の保護者から時折、「卒園後、我が子が『幼稚園で〇〇したことが楽しかった』『幼稚園のときに〇〇したよね』とよく思い出したように言います。金城学院幼稚園でよほど楽しい日々を過ごしていたのだなと実感します」というお声をいただきます。自分の好きな遊びを見つけ、満足するまで遊べる時間と空間が約束された幼稚園での日々の中で、ともに過ごす仲間を得た子どもたち。縦割り保育の中で年上児が年下児のお世話をすることを自然と学んだ子どもたち。神さまや多くの人々に守られている安心感と、さまざまな経験から得た自信を胸に、子どもたちは日々成長していくことを願っています。そのような中、心身ともにひ



とまわり大きく成長した子どもたちが少し照れくさそうな、嬉しそうな表情で久しぶりに幼稚園を訪れてくれると、私たちとても嬉しくなります。

幼稚園では毎年夏に、卒園した1・2年生の同窓会を行います。会の出席率は90%以上で、ほとんどの子どもたちが参加してくれます。短い時間ではありますが、久しぶりにみんなで礼拝の時を持ったあとにゲームやプールで存分に遊んだり、お友だちのおしゃべりに花が咲いたり楽しく過ごしています。

また同窓会に限らず、卒園生で希望する子どもたちがバザーや年長児のお泊まり保育のお手伝いに来てくれます。奉仕の心を持ってお手伝いをしてくれることはもちろん嬉しいのですが、それ以上に、来てくれた卒園生自身がとても喜び楽しんで過ごしている姿を見るのが何より嬉しいです。

幼稚園が幼い日の過ぎ去った思い出の場としてだけでなく、成長してもなお帰ることのできる場として感じていてくれることは大きな喜びです。また卒園生と在園児が年齢を越え



て同じ遊びや行事の楽しさを語り合えることで、在園児の中には「ぼくも大きくなったらお手伝いに来る」と言ってくれる子もいます。

子どもたちが在園中も卒園後も「幼稚園での日々は楽しかったね」「幸せだったよね」と感じられるように、日々の保育に取り組んでいきたいと思っています。また、幼稚園はいつでもいくつになっても自分が帰ることのできる場と思ってもらえるように、これからも努めていきたいと考えています。

「高校生ESDコンソーシアム in 愛知」で 生徒会執行部がプレゼンテーションに参加



ESDとは「持続可能な開発のための教育」のことです。今年、愛知県と岡山県で開催された「ESDに関するユネスコ世界会議」に先立ち、11月2日、3日に「高校生ESDコンソーシアム in 愛知」が名古屋大学豊田講堂で行われました。県内を中心に11校、約100人の高校生が参加。それぞれが取り組む国際支援について、発表や議論を交わしESDへの理解を深めました。

1日目のポスター発表校によるプレゼンテー

ションでは、生徒会執行部が「Connection ～多くのつながりの中で、できたこと～」をテーマに、「東日本大震災復興支援活動」と「救缶鳥プロジェクト」の二つの活動を紹介しました。生徒会会長の加藤江梨花さんは「準備期間が2週間しかない中で、パワーポイントのスライド資料とポスター制作が大変でした。

執行部のみんなに協力してもらい、何とか仕上げることができました」と振り返ります。

ポスター発表で、参加者からの関心が高かったのが「救缶鳥プロジェクト」です。これは生徒の災害用と恵まれない国への支援のために中高で取り組んでいる活動ですが、「自分たちの学校でも取り入れたい」「どこで購入できるのか」といった声が多く上がったそうです。

コンソーシアム開催にあたり、高校生運営委

員として準備会から参加していた執行部のみなさん。中島日向子さんと西村沙恵さんは「他校の方々との意見交換ではとても刺激を受けました」「一緒に作り上げる過程も勉強になり、他校の方とも『つながり』を感じました」と話します。2日目のワークショップで総合司会も経験した芳賀光来さんは、「ESDについて知ることも大切ですが、そこからどうアクションを起こすか。まずは個人できることから挑戦したい」と決意を新たにしていました。

生徒会執行部では、学校全体にESDについて広め、生徒一人ひとりに考えてもらえるよう、今後も普及活動に努めていきます。



科学部員が「ゆめちから栽培研究プログラム」に参加 1年間を通して超強力小麦の栽培研究を実施

高校の科学部はこのたび、Pasco主催の「ゆめちから栽培研究プログラム」に参加。今年9月にスタートし、来年の9月まで1年間を通して「ゆめちから」の研究を行っていきます。「ゆめちから」とは北海道の農業試験場で開発された国産の超強力小麦のこと。超強力小麦は高温多湿の日本では育ちにくいとされていましたが、「ゆめちから」の開発により、広い地域での栽培が期待されています。このプログラムでは、学校のプランターで生徒たちが「ゆめちから」を実際に栽培し、生育状況の観察やデータの分析、実験などを行いながら、最適な栽培方法を研究していきます。今年は金城学院高校のほか石川県、岐阜県の高校と計3校でプログラムを実施します。

栽培研究を行うのは科学部員「ゆめちからグループ」の16人。世光館4階テラスに備えた7つのプランターに、10月18日に種を蒔きました。発芽率は91%と高く、これから施肥や麦

踏みなどを行いながら生徒たちが主体となって虫や鳥の防除対策なども考えていきます。「生徒たちは肥料の与え方などグループで議論しながら、最善の方法をまとめています」と顧問の田中武彦先生は話します。また「自分たちで仮説を立てて計画、実行し、まとめることは科学的な方法を学ぶために大変有効です」ともいい、「こうした学びは科学だけではなく、さまざまな勉強や社会生活にも役立つと思います」とも話し、生徒たちの学びの成長に期待を寄せています。

栽培研究の締めくくりは自分たちで育てた「ゆめちから」を使い、パンを作ります。生徒たちの研究の様子はレポートブログで見ることができます。ぜひご覧になってください。

ブログURL:
<http://www.yumechikara.com/school/index.html>



中学グリークラブが4年連続で輝かしい成果 全日本合唱コンクール全国大会で銅賞を受賞

今年10月26日に盛岡で第67回全日本合唱コンクールが行われました。中学グリークラブは中部代表として4年連続出場し、見事銅賞を受賞しました。

コンクール参加に向けて、林光氏の作曲による「童声合唱のための はる なつ あき ふゆ」より「さくら」「さつきばれ」「うしかい・おりひめ・たなばた」を選曲し、部員たちは4月から練習に取り組みました。この曲について副部長の柘植萌希さんは、「言葉遊びのような歌詞に、音程やメロディで変化をつけて歌います。表情豊

かな楽しい曲」と話します。長年グリークラブを指導していらっしゃる小原恒久先生の、「コンクールはあくまでもレベルアップの手段。グリーでの活動を通して音楽の楽しさを感じてもらいたい」との思いから、全国大会には1年生から3年生まで、全部員が参加しました。

「4年連続出場が懸かっていたので、大会前までずっとプレッシャーでした」と、部長の田口さくらさんは話します。朝練、昼練、午後練と1日に三回の練習の積み重ねは、9月に開催された中部合唱コンクール中学同声の部で金賞(併せ

へと実を結びました。とくに全国大会という大舞台での銅賞受賞は大きな達成感に。「すべては小原先生のご指導のおかげです」と、部員たちは感謝の気持ちを忘れません。

今年度は11月にメサイア、2月には定期演奏会、そして3月にはクラブ恒例となったポーランド演奏旅行が控えています。これは中学3年生から大学生までのグリークラブの有志が参加する国際交流で、ポーランドの学生たちと数カ所で演奏会を行うほか、アウシュビッツで平和学習も体験するそうです。

日頃の努力や意義のある経験が部員たちを次なる目標へとつなげます。次は5年連続出場を目指し、これからも日々の練習に邁進します。



て羽島市教育委員会賞)受賞、そして今回の受賞



中学3年生の馬場扇杏さん、愛知県私学弁論大会で1位 本校三回目の快挙

中学3年生の馬場扇杏さんが、11月5日に安城市文化センターで行われた「第62回愛知県私学弁論大会」に出場。見事、中学の部1位、愛知県知事賞、中日新聞社賞1位に輝きました。

馬場さんが弁論大会に出るきっかけとなったのは、お兄さんとテレビで観戦したサッカーのスペインリーグです。「グラウンドにバナナが投げ込まれているのを見て、『人種差別だ』といった兄の言葉の意味がわ

からなかったので調べました」と馬場さんはい、自分で調べたその内容を作文のテーマに設定しました。自らの渡米経験で見聞したこと、社会と英語の授業でキング牧師について学んだことから影響を受けたそうです。

まずはクラスで弁論し、校内弁論大会で優勝し、今回の県大会に臨みました。誰にでもわかる簡単な言葉で表現するよう努力し、さらに大会の2ヶ月前からは完璧に暗記。「学校の代表になれたのは、自分の言葉できちんと話せたことが大きかったと思います」と話します。

県大会に出場した中学校は全14校。馬場さんは13番手で出場しました。「待ち時間を重要視し、早口にならず時間いっぱい話せるようにと国語の先生に指導していただきました」といい、その成果があっただけでなく、ほかの学生が約4分だったのに対し、馬場さんは4分43秒で話せました。「金城学院中学と呼ばれたときは、



まさかと思いました」と馬場さんは優勝の瞬間を振り返ります。また「知らない人の前で話すことはいい経験になり、プラスになった」ともいいます。生徒会議長を務める馬場さんのさらなる活躍を期待します。